31-1119

小学生に対する薬学教育「これできみもおくすりはかせ」

○森住 紀美子[1]，早川 真希[1]，寺田 恭子[1]，宮本 法子[1]（[1]東京薬大薬）

[目的]わが国において、発育、発達過程にある青少年の薬物乱用が社会問題化しており、低年齢化が進んでいることが明らかにされている。このため、小学生高学年に対して、麻薬・覚せい剤等の薬物乱用防止教育は、正規の授業が行なわれているが、薬に関する授業は行なわれていない。そこで、私たちは、小学生低学年から、自分の体を知り、健康に興味を持ち、さらに病気になった時には、正しく薬を飲むことの大切さや、逆に誤った薬の飲み方をした場合の危険性や副作用などについて認識する機会が必要ではないかと考えた。
このような理由から、小学生低学年に対して薬の授業を企画し実践した。
[方法]①絵本調査②薬のテキスト作成③本学に隣接している学童クラブ（１～3年）での授業④アンケート実施
[結果・考察]アンケート結果から、授業(人形劇)は楽しんだが、薬そのものについて興味を持った生徒は少なかった事がわかった。対象が 1～3 年であったため、今後は学年別のテキスト作成と授業を企画することが必要であることを認識した。今後のテキスト作成に関して、日本と海外の絵本を比較した調査から、示唆に富んだ結果が得られた。薬物乱用防止教育は国をあげて取り組み始めており、学校薬剤師等が幅広く活躍し授業を行っているが、薬学生が「小学生に薬を教えていく」ことは、意味のあることと考える。４年間で学んだ薬学の知識が、子供達の質問にどう答えうるのか試される時間でもあり、また、小学生にわかりやすく教えることの難しさは、自分たちの知識量と表現力に左右されることも実感した。さらにまた、小学生にとっても学生が教えることで薬学への興味を増し、「薬のプロは薬剤師である」との認識も深まったのではないかと考える。